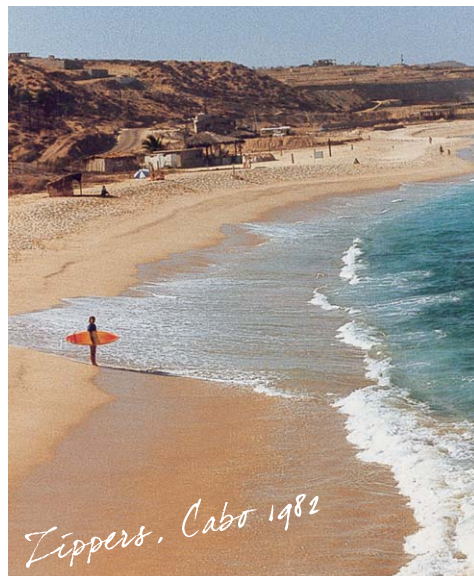


Music

ジェームス・テイラーと夢のサーフトリップ、メキシコ

文・写真/ジョージ・カックル
Text & Photos: George Cockle



おそらく1976年ぐらいだったと思う。俺がよくカリフォルニアの海岸線をヒッチハイクしていた頃だ。日本を出て世界一周をし、サンフランシスコにたどり着いて住んでいた。その頃はあまりサーフィンもしてなくて、違う世界にはまっていた。

そんなある寒い冬の日、LAから北に向かうとしてマリブの手前のハイウェイ1で指をあげていたら、ぼろぼろのビートルが止まってくれた。止まってくれたというより、俺をひきそうになったと言った方がいいかもしれない。ハイウェイの横の泥に乗り込んできて、こういった。

「Hey man, where to?」どこへ行くんだい？そして俺は答えた。

「Anywhere north.」北の方ならどこでも。

「Cool, hop in!」いいぜ、乗りなよ！

早速、俺は彼のビートルに乗ることになった。上には手作りのサーフバック。彼がドアを開けてくれた時はちょっと驚いた。シートははげで、ココナッツの繊維みたいな素材がでていた。床にはファーストフードの袋と灰皿に使われていたコーヒーの紙コップ。そうっと座ってドアを閉めたら、彼はギアをファーストに入れて走り始めた。バンバンいいながらビートルは一生懸命にもう一度道路

に乗った。バックミラーを見ると後ろは青い煙が煙幕みたいに空を消して行った。ステレオはエンジンの音よりも大きかったけど、わりといい音だった。そこでかかっていたのがJAMES TAYLOR (ジェームス・テイラー) のアルバム「ゴリラ」だ。曲は「SARA MARIA」。ジェームス・テイラーのことは知っていたけど、このアルバムは知らなかった。それまで、俺はインドを旅していたから、全然聞いたこともなかった。バックパッカーの旅にはラジオがないからね。その曲が終わり、しばらく何の曲もかからなかった。車を走らせながらお互いにいろんな話をしていたら、急に車が大きな石にぶつかったような音がして、自動的にA面にガチャッと変わった。その次にかかった曲が「MEXICO」。俺たちの会話は自然と止まり、二人でマリブの海岸線の景色を見ながらジェームス・テイラーの優しい歌声を聴いていた。曲が終わったら俺の頭の中はメキシコだった。曲の中の歌詞でジェームスがこう歌っている。「行ったことはないけど、一回でも行きたいか……」。その瞬間からいつかメキシコに行こうと決めた。俺を車に乗せてくれた彼は何度もメキシコへ行っていた。夕日を見ながらいろんなメキシコの話聞かせてくれた。

カリフォルニアのサーファーにとっては、メキシコは夢のサーフトリップの場所。アメリカの隣の国だけど、メキシコの時間は百年前にタイムトリップしている。まっすぐ南へ走れば、バハ半島。今でも海岸線を走れば、誰もいないポイントがたくさんある。小さな村に入って、ビールと辛いメキシコ料理。でもそこにいるかわいいセニョリータには声はかけられない、ちゃんと兄貴が横から見ているからね。

何時間かして、お互い行きたい方向が変わり、俺はその車から暗い寒い道路に降りることになった。その夜は朝まで車が止まってくれなかったんだけど、ジェームスの歌が寒い夜を暖めてくれた。“行ったことはないけど、一回でも行きたい……”

それから何年かして、俺はもう一度サーフィンにハマって何回もメキシコに行くことになった。カボ・サンルーカスのそばのジッパーズにはよく行った。今も海の沖に沈む紅色の太陽を、もう一度見たいと思う。



ジョージ・カックル ●60~70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴38年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com